

(三) 西苑にて、再び

ウェスト・ガルテン

ラインハルト個人としては一〇年余りに及んだ忍従の日々が報われ出した、と感じてもよい時期になっていた。

葬儀が終わると、新無憂宮西側の広大な一角の住民への帝国宰相の名による布告が為された。すなわち西苑^{ウェスト・ガルテン}、フリードリヒ四世の妻妾に対して、家族の居る者は家族の許へ戻ることを許し、家族のない者は帝国政府の責任において帝室の所有になる山荘や別邸を分かち与えるというものだった。同時に彼女たちには、その生涯を保証するだけの年金が与えられるとの布告が併せて公布され、これは概ね、好感を持って迎えられた。フリードリヒ四世の側室の内、相当数が平民の出身であり、その過半はアンネローゼ同様、決して豊かとは言えない家庭の出身者であったからである。

いずれにしても、この布告に伴い、アンネローゼもまた西苑^{ガルテン}からの自由を与えられた。ラインハルトにとっては百人をはるかに上回る他の西苑の住人の行く末よりも、個人としてはこちらの方が重要だった。

「キルヒアイス——」

布告の出た当日、ラインハルトは真つ先にキルヒアイスを呼んだ。

「姉上を迎える準備は任せる。姉上と日を打ち合わせてくれ」

「はい、ラインハルトさま」

キルヒアイスにとつても、これは願ってもない役目だった。思わず頬を綻ばせるキルヒアイスに、ラインハルトは悪戯っぽい微笑を浮かべて、一通の封書を差し出した。

「……これは？」

『宛・帝国軍上級大将ジークフリート・キルヒアイス閣下』——丁寧な肉筆の表書きの筆跡には見覚えがなかった。

「どういわけか分からないが、オーベルシュタインが預かってきた。招待状だ」

「招待状……ですか？」

裏返してみても、初めてキルヒアイスは事情を了解した。帝国軍中将ヴィンフリート・リーフェンシュタール・フォン・シュミットバウアー子爵と、同じく帝国軍予備役大佐コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー子爵夫人の署名が、互いに寄り添うように書き込まれていたのだ。

「俺にも来ている」

ラインハルトはもう一通、同じ書式の封書を示して見せた。

「行ってもいいが、お前と二人で元帥府を空けるわけにも行かないし、それにシュミットバウアー子爵夫人からは、どちらかお一方ひとかたでもという伝言もあったそうだ」

「伝言？」

「ああ——」

やはりオーベルシュタイン経由だ……とラインハルトの苦笑が深くなった。オーベルシュタインと結婚式への招待……どう考えても、これ以上のミスマッチは少ないだろう。

「……であれば、ラインハルトさまがお行きになればいいかですか。結婚式に帝国軍元帥を迎えることなどめったにないことですし、なおのこと席が華やぐというものではありませんか」

「キルヒアイス……」

わかりやすい人だ、とキルヒアイスが思うのはこんな時である。もつとも、ラインハルトが人前で、感情をストレートに表情に反映させることはひどく珍しい。完璧なほどの自己への制御と、心

許した者の前での開けつびろげなまでの、自身の感情の表出とが併存し、かつ矛盾を来していないのが、ラインハルトの人間としての希少価値を主張し得る特質だとも言える。キルヒアイスには、後者こそがラインハルトの人としての本質だと思えるのだが、おそらくオーベルシュタイン……ひょっとするとオスカー・フォン・ロイエンタールなどもまた、前者にこそ彼らの未来を託すべき資質を見いだしているのではないだろうか。

今もあからさまにむつとした顔つきになったラインハルトは、のぼした指先にキルヒアイスの頭髪を絡め取り、引つ張った。

「俺をからかっているのか。俺が席に並んでいた方が、宴席の見栄がいいとか」

「ええ……」

髪を引つ張られるのに閉口しながらも、キルヒアイスはラインハルトの言葉を否定しない。

「そういう風に言う人が少なからずいるのは事実です……ですけど、ラインハルトさまは儀礼のために私に列席しろと仰っているわけではないでしょう？」

「シュミットバウアー准将には……まあ、借りがあると言えばあるからな」

認めたくはないが……という口調だった。

同盟領ヴァンフリートでの戦いで、ラインハルトは……ということはキルヒアイスも、シュミットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデの兄ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー准将に窮地を救われたことがある。戦場で友軍同士が助け合うのは当然以前のことであり、それを借りと認識する必要もないことなのだが、他者に救われてよしとしないラインハルトの性格から言えば、それはやはり『借り』以外の何者でもなかった。彼らが、この後の生涯をとにもすることを誓い合う儀式への参

列を拒否することはできない。それがラインハルトの判断に違いなかった。彼らが、今後、味方となるうとも、あるいは敵として戦場でまみえることになるだろうとも……ラインハルトの意識する『借り』に限らず、この招待状の差出人たちとは、互いを無視しあえぬほどの関わり合いを持ってしまったからだ。そう判断することこそ、ラインハルトが彼らを自分と対等の『人』として認めた証左である。

キルヒアイスが、ラインハルトに微かな危惧を抱くとするなら、彼が『人』と認める相手とそうでない相手とで、無意識の裡に応接のギャップを設けてしまうことだった。

例えば、自分がラインハルトに先だって戦死するようなことがあれば、それはラインハルトにとつて取り返しのつかない打撃と受け取られるだろう。自惚れでなく、キルヒアイスはそう思う。一方で、元帥府の他の幕僚の戦死に対して、ラインハルトは悼みを覚えるだろうし、その遺族に対しても本心から意を尽くそうとする。ただし、ラインハルトがその生き方そのものに疑問を覚えるほどの打撃を受けることは決してないに違いない。

万一にも、それらの乖離が大きくなり、『あの方は、ご自分が自身と対等と認めた者以外は本質的に必要とはされないのだ』などという目でラインハルトを見る者が現れた時、天を指すようなラインハルトの足取りに初めて、翳りが生じるのではないだろうか。とは言え、キルヒアイスといえども、まだここまでの分析を明瞭な意識の中に抱いたことはない。ただ、すべてがラインハルトの前に道を開き始めたかのようなこの時期に、キルヒアイスの胸裏に漠然とした微かな不安としてわだかまっていたのである。

「どのような服装をしていけばいいのでしょうかね？」

話の接ぎ穂のようなつもりだったし、実際、キルヒアイスも……無論、自身のそれを含めて……結婚式というものへ出席した経験

がなかったから、要領が分からなかったのだ。

上級大将の地位を得ているとは言え、キルヒアイスはまだやつと二一歳に手が届こうという若者でしかない。同年代の若者のほとんどがまだ結婚を、遠くはないが至近の未来のできごとでもないと考えている年齢なのだ。また、幼年学校以上の上級学校に入っていない彼にはいわゆる同期生がいない。彼を結婚式に招こうという動機を持つ同年代の人間は決して多くない。

シュミットバウアー子爵夫妻の結婚式と言うことであれば、儀礼のための出席をするつもりはなかったから、礼を失するのが嫌だった。

だが、案の定と言うべきか、ラインハルトもまた言葉に詰まっ

てしまったのだ。

「さあ……な。礼服で良いのではないのか？」

「大礼服……と言うことは、ありませんよね？」

「第一種軍装で十分だろ、自分が結婚するわけでもないのだから」

「自分が結婚するのに大礼服を着るのですか？」

「だから、お前が結婚する訳じゃないだろう……が、待てよ、花婿は帝国軍中将だ。とすれば、当然、大礼服と言うことになる。列席者が普通の軍服で良いのか……な？それに、花嫁なり花婿なりに何かプレゼントを持っていくと聞いたこともあるぞ……」

「どんなプレゼントでしょうか？」

「さあ……俺にも経験がないことだし……」

しばらく考えた後、ラインハルトが提案したのは、キルヒアイスの帰省だった。

「帰省ですか……？」

「そういうことなら年長者に聞けばいいのではないか。ご両親にも随分ご無沙汰しているだろう？良い機会だし、一度、帰ってこ

い。帰省と言つほどの距離でもないし」

……年の功など毛筋の先ほども認めないラインハルトにしては珍しい一言だった。つまりは、この分野に於いてはラインハルトも年長者の経験に一定の敬意を持ち合わせていたと言つことになる。

「今を逃がしたら、同じ帝都の内でもなかなか思うようには帰れないぞ」

「しかし……」

「俺に遠慮することはない」

ラインハルトは笑った。恐れを知らぬ篡奪者の野心に溢れる笑いで、あるいは敵と認めた相手に浴びせる嘲笑でもない、純粹に歓びを表象する笑顔だった。

「姉上も近々に帰ってこられるのだから——ここへ」

そうなのか——とキルヒアイスは納得した。家族のないラインハルトに遠慮して、敢えて帰省を控えていた。キルヒアイスの裡にそんな面も確かにあったことを、ラインハルトは見逃していなかったのだ。

それに、『今を逃したら……』の一言も、キルヒアイスが全面的に首肯するところだった。門閥貴族連合と真正面から戦う時期が目前に迫っている。同時に、後背の敵である自由惑星同盟への謀略工作も急ピッチで進めねばならない。彼らにとって僅かな休息の時すらもさらに急激に少なくなりつつあることに間違いはなかった。

ウェスト・ガルテン

西 苑でのアンネローゼの生活は足かけ一年に及ぶ。菩提樹の木立と泉水に囲まれた今の館に移ってから数えても、優に九

年にもなる。アンネローゼ自身、幼い日を過ごした生家を除けば、その人生において最も長く時を過ごした場所だと言えた。

とは言え、館を引き移るについては大した手間はかからなかった。

アンネローゼ自身が周辺の整理整頓に極めて長けていたし、この館でアンネローゼの私物というものは多くはなかった。強いて言えば、後宮を去る女性たちへ寄贈されるべきものとしてフリードリヒ四世が指定していたとされる、その遺愛の品が何点か届けられていた。

「そんなもの、受け取るな！」

ラインハルトはそう言つて顔をしかめた。彼にしてみれば、姉があのお皇帝の所有物にされていたという記憶を呼び覚まされるような品が身近に置かれるなど、身震いするほどの嫌悪以外のなものでもない。が、まだゴルデンバウム王朝の一部将であるという立場を完全に脱し切れていない時点において、それは不敬を咎められるべき言葉だった。

ただ、ほとんどが、アンネローゼがこの館で長年使い馴染んでいたチェストや鏡台などだったことが、辛うじてラインハルトをして許容のラインを僅かに下げる気にさせたのだ。例外は皇帝の薔薇園に置かれていた華麗な花器だったが、これとて亡き先帝の遺愛の品と言われれば、こつそりとそれらを処分してしまう、などという強硬手段もとれないのは確かだが。

いずれにしても、一切の差配が、帝国軍で最も有能な副官でもあった赤毛の若者に委ねられている以上、アンネローゼが館に最後の別れを告げる日には、彼女が身一つで館をあとにすればよいという状態にまですべてが整えられていたのは当然だった。

アンネローゼは先帝の寵姫……この呼び方をラインハルトは甚だしく嫌ったし、キルヒアイスも完全に平静な気分ではアンネ

ローゼをそう呼ぶことはできなかった……であり、伯爵夫人を名乗ってはいるが、グリユーネワルト伯爵家の財産なり領地なりというものはほとんどない。強いて上げれば、帝室から与えられる歳費と、首都郊外の幾つかの莊園、および山莊などに過ぎない。その管理にしても、執事のコルヴィッツ夫妻だけで十分だった。この点、ローエングラム伯爵としてローエングラム星系とその周辺宙域の領有権を与えられたラインハルトとは事情がまるで違っていた。

また彼女の許に猟官に訪れる酔狂な貴族など数えるほどもいなかったから、サロンが面会客で溢れることも、彼らの手みやげが門前に山をなすということもあり得なかった。

がらんとした居間にキルヒアイスが顔を見せたとき、アンネローゼは一人、部屋中央に立つて室内を見回しているところだった。

「アンネローゼさま、そろそろ、よろしいですか」

「ああ、ジーク……」

ちよと背を向けていたアンネローゼが振り返り、微笑う。

キルヒアイスが安堵したのは、それが見慣れた、アンネローゼの笑顔だったからだ。正確には彼の記憶の中にある笑顔とやっとな一致したというべきだった。ここ二年ばかり、笑顔と二重写しのように透けて見えていた陰翳は、やはり先帝フリードリヒ四世が彼女の心に落としていた影だったのだ、と。

「もう、すっかり何も無いのね……」

「ええ、あとはアンネローゼさまが移られるだけです」

頷き、それでもまだ居間の中を見回すともなく見回しているアンネローゼに、キルヒアイスは問うてみた。名残惜しいとお思いですか……と。

アンネローゼはちよと眉を寄せ、曖昧に笑った。

「名残惜しい……というのかしら」

言葉を探す口調だった。

「そうね……ここ以外の生活が、あるとしてもずっと遠い先のこと、何年もしたら、そういうこともあるかも知れない……違うわね。ここ以外に住む日があるなんて思いもつかなかった」

マントルピースの上を、アンネローゼは指先になぞった。

一〇年前、見上げなければならなかった女の横顔が、今はずつと下に見えている。アンネローゼは変わらない。一〇年前と。変わったのは自分、自分たちのだろつ。

キルヒアイスはある問いを堪えている。ラインハルトさまや私があるをここから救い出そうとしていることは、お忘れだったのでしょか……と。

「どんなに辛かったとしても、それが毎日続いて、何とか我慢できるのだしたら、それに馴れてしまふもあるということ……分かつて、ジーク？」

「は——？」

自分の想いにやや深く足を取られすぎていたのかも知れない。不意にアンネローゼの口調が変わったのに、キルヒアイスはいつて行き損ねた。

「アンネローゼさま？」

「まして、それが辛いどころか、それなりに安穩で平和な生活だったとしたら、それに馴れて溺れてしまうことがあったとしても……」

「アンネローゼさま、何を仰っているのですか？」

「あ——」

アンネローゼも我に返ったように、眼差しをキルヒアイスに振

り向けた。

「ごめんなさい、ジーク。変なことを言ってしまったわ。忙しいのに、ごめんなさいね」

ふと視線が逸れ、飾り棚の一つに残っていた写真立てを捉える。彼女の視線をたどっていたキルヒアイスがそれと気づき、長い腕を伸ばした。さして凝った造りとも言えないフレームの中で、輪郭が少し曖昧になった人物が四人、笑っていた。

前列に並ぶ幼い姉弟が、彼にとつての運命の天使たちであることは自明だったが、後ろに立つ二人の姿は、微かな記憶を呼び覚ました。最後の住人がヴァルハラへの門をくぐった後、廃屋も同然な隣家の中から僅かに届けられた遺品。褪色がひどく、人物の輪郭をたどるのがやっとだった写真は、まだキルヒアイスの手許にある。

「ご家族……ですよね？」

「ええ」

ほとんどあてけないと言っている仕事で領き、アンネローゼは付け加える。もう、それだけしか残っていないと。

写真の男性……つまり、アンネローゼとラインハルトの父に違いない……から、隣家のヘル・ミューゼルの荒れすさんだ姿を連想するのは難しかった。そして、彼の隣に並んだ女性の姿も既にほとんど輪郭だけになっている。アンネローゼによく似た繊細な造作の顔立ちと、その三方を飾っている、姉弟と同じ金色の髪を認めるのがやっとだった。

キルヒアイスが手渡すと、アンネローゼは嬉しそうに微笑んだ。「これは自分で持っていきたくて……最後まで残しておいたのだけれど、もう少しで忘れるところだったわ」

「では、もう行きませんか。ラインハルトさまも待っているらしいですよ」

「そうね——どなた？」

最後の問いは、サロンの入り口に姿を現した人影に向けたものだった。

アンネローゼが視線を転じるより早く、キルヒアイスの長身は入り口に正対する姿勢を取り、アンネローゼを背後に庇っている。同時に、サロンのどの窓から死角になるように、さりげなく彼女の位置を誘導している。

本来、西苑では許されないはずの武装を、ラインハルトとキルヒアイスは許されていた。

既に銃把にかかっていた手が僅かに緩んだのは、鮮やかな金茶色の髪が視界に入ってきた時だった。

「シュミットバウアー男爵夫人……」

「フレイツクライフ」

「正確には子爵夫人ですけれど、そんなことはどうでもいいですわね、キルヒアイス上級大将閣下」

「コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー……偶然の悪戯からか、ラインハルト、そしてキルヒアイスとも浅からぬ縁を持つことになった女性は、エルフを思わせる細面に表情のない微笑を浮かべた。斜めに差し込んだ日差しが、エメラルド・グリーンの瞳に映えて、金色の光の渦となつて弾ける。何となく、見る者の背に冷たいものを感じさせる、禍々しいと言っている光だった。」

彼女の兄、ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーを射殺したのは、ほかならぬキルヒアイス自身である。だが、皇帝暗殺の濡れ衣を着せられ、謀殺寸前の窮地にあったアンネローゼを救い出した時、キルヒアイスに手を貸してくれたのも彼女だった。

彼女と彼女の婚約者のヴィンフリート・フォン・リーフェンシュ

「タール。子爵にして、中將の地位を併せ持つヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールは、ラインハルトたちに見ればどうしても味方にしておきたい、数少ない大貴族の一人だった。そして、彼女自身は、アンネローゼが市井の片隅から見いだされ、後宮へ拉致されなければ、フリードリヒ四世によってこの西苑に幽閉されるべき運命を与えられていた一人だったのだ。」

「ただ、ラインハルトたちの重ね重ねのアプローチ、辞を低くしての招聘に対して、ヴィンフリートもコルネリア・ゲルトルーデも沈黙を守り続けている。」

「馬鹿と知りながら敢えて馬鹿を押し通す……」

「そうした人物が、もしいるとすれば、このカッブル以外にない。」

「それがラインハルトとも一致したキルヒアイスの意見だった。」

「やむを得ない。敵に回ると考えて手を打とう」

「それがラインハルトの最終的……に近い……判断だった。」

「——どうしてここへ、子爵夫人？」

「女官長補佐の肩書きを示したら簡単に通してくれました。まだ、辞めてはいませんもの」

「コルネリア・ゲルトルーデがキルヒアイスの問いをはぐらかしたのは、意図を読み損ねたからでないのは自明だった。」

「彼女とヴィンフリートには二四時間、監視員をつけてある。キルヒアイスの知らぬ内に、彼女がこの場へ現れるはずはない。本来なら。」

「女官長その方といえども、お通ししてはならない。そう命令してあったはずです」

「人のすることですもの。忘れることもあるんじゃないでしょうか」

「キルヒアイスの突き出した言葉の槍を、コルネリア・ゲルトルーデは微かに金茶色の髪を揺らしたただけではね除けた。」

「伯爵夫人が、今日、西苑をお離れになると聞きました。間に合つて良かった」

「伯爵夫人に何のご用ですか？」

「お別れを申し上げようと思つて」

「コルネリア・ゲルトルーデの微笑にはやはり表情と呼べるものが何もなくあった。」

「西苑の規模が縮小されるそうですから、わたしも今の職は辞するつもりです。多分……しばらくはお会いする機会もないでしょうから」

「そんなことはないのではありませんか」

「どういう意味でしょうか？ それに、あなたとお話したいわけではないんです、上級大将閣下。もう、お出になるのなら、時間もそんなにないわけですね。できれば、直接お話をしたいんです」

「武装はしていません……と言われて、アンネローゼと彼女を二人きりにするほどキルヒアイスは、この女性に気を許してはいない。コルネリア・ゲルトルーデは女性ながら、キルヒアイスに比肩するほどの白兵戦の巧者なのだ。素手でアンネローゼの生命を奪うくらい、彼女にしてみればまさに朝食前の一仕事ですらない。」

「もう、しょうがないなあ。この騎士さまは……」

「両手を天頂に向け、コルネリア・ゲルトルーデは初めて苦笑する。」

「じゃあ、そこにいて、銃を抜いて、わたしの頭に照準を合わせていても良いです。丸腰だというのが信じられないなら、身体検査でもしてみます？ なんなら裸になって見せましょうか、ここですか？」

「いきなり襟元のボタンに手をかけるコルネリア・ゲルトルーデに、キルヒアイスは思わず二、三步後じさりした。浮かんでもい

ない額の汗を拭い、相手の言葉を受け入れたしるしにキルヒアイスはさらに数歩を下がり、それでも銃は抜いた。

味方として信用することはできないが、この女性は嘘だけはつかない。裸になる、と言えば本当になりかねないのだ。それは困る、大いに困る。

目を丸くしているアンネローゼに、コルネリア・ゲルトルーデは丁寧に一揖した。

「短い間でしたけれど、お知り合いになれたことを誇りに思います、グリューネワルト伯爵夫人」

「子爵夫人……」

言い差し、アンネローゼは言い替える。

「わたしもです、ゲルタさん」

「その呼び方は、本当に少しの人にしか許していません」

笑顔は、今度ははつきりと表情を持っていた。アンネローゼの言葉を喜び、歓迎しているそれだった。

「辞めて……どうなさるの？」

「結婚します」

ちよつとはにかんだような表情を、キルヒアイスは初めて見たと思った。どうしても、この女性を相手にする時、肩から力が抜けきらない。一瞬後の動きが視界の内に留まらないのではないかという危惧から自由になれない。その表情は常に制御下にあり、こんな風に無防備に内心を直結させたことはなかったのではない

か――
「言ってみれば、寿退職ですわね」

俗語に類する表現が、アンネローゼのユーモアのセンスを大いに刺激したようだった。

アンネローゼの表情が満面の笑顔に溶けた。

「おめでとう、フロイライン・ゲルタ。お相手は、リーフェンシュターリ子爵ですね？」

「ええ、他にはいません。こんなじゃや馬を物好きにも娶うなんて勇氣ある男は……あの、ゲルタでいいです。フロイラインなんて、自分ではないような気がします」

「それなら、わたしのこともアンネローゼと呼んでくださいね、ゲルタ……それで、式はいつ？」

「一週間……ああ、あと八日後です」

「何が贈れるものがあると良いのだけれど、何がいいかしら？」

「いいえ、何も。ヴィンフリートとも話しているんです。こんな時代だし、式も簡素に済ませようって。それで……」

キルヒアイスは呆氣にとられる。

アンネローゼはそれほど言葉の多い女性ではない。ラインハルトたちと話す時も、同性であるシャフハウゼン子爵夫人やヴェストパーレ男爵夫人と同席しても、話すのはほとんど子爵夫人であり、男爵夫人である。

今も、アンネローゼが一を話す間に、五も六も言葉を綴っているのはコルネリア・ゲルトルーデの方だった。ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールとの出会いから、その後の紆余曲折はかなり省略されていたように思えたが、結婚式の準備や、式次第の細部に入ると、この人物でもこれほどに言葉が多彩になるのか、とキルヒアイスを驚かせた。

驚かせたのだが、詰まるところ、他人の結婚式である。アンネローゼはさすがに女性だけあって、真剣に耳を傾け、相づちを挟んでいたが、キルヒアイスにしてみればこれほど退屈な話題もなかった。

無論、万一のことを考えて二人の会話に向ける注意をゆるがせにはしなかったが、それでもほんのわずかの退屈な気分が、会話

の断片をその耳から取りこぼさせたとしても、それはやむを得ないことだったに違いない。かつ、結婚を間近に控えるという最も幸福な時期の女性が、その幸福を語る会話を完全な制御の下に繰り広げているなどと想像できる人間がもしいたとすれば、その人物こそ異常と言わねばなるまい。

それでも、もし、コルネリア・ゲルトルーデが携えてきた何かを手渡そうとしていれば、すぐに間に割って入ったに違いない。しかし、『丸腰で手ぶら』という言葉に嘘はなく、コルネリア・ゲルトルーデは何も取り出そうとはしなかった。

唯一、数葉のメモをアンネローゼに渡していたが、それすらペンとメモ用紙をキルヒアイスに借りて書いたものだった。キルヒアイスも目を通したが、住所とPDAのIDは彼女の新生活の拠点を示すものとしが読みとれなかった。

「お手紙を出させて下さいね、ゲルタ」

「ええ、お待ちしています、アンネローゼ」

立ち上がり、コルネリア・ゲルトルーデが辞去の言葉を述べた時、キルヒアイスはちよつと異様な感覚に囚われる。アンネローゼをその名で呼び捨てにする人物を、彼はヴェストパーレ男爵夫人しか知らない。

そう思い、気づく。コルネリア・ゲルトルーデは二五歳。アンネローゼと同じ年である。本来なら、アンネローゼにも同年配の友人が数多くいたはずなのだ。父が事業に破れ、彼女自身が学業を断念し、それから間もなく皇帝の許で黄金の鳥かごに閉じこめられる、などという運命が彼女を翻弄しさえしなければ。

「あなたのお姫様を大切にさいますね、キルヒアイス閣下」

気づいた時、エメラルド・グリーンの鞆い目が、視線の僅かに下にあった。

「翻意はできませんか？」

敢えて問いを放ったキルヒアイスに、蒼緑の目は再び表情を消していた。

「一五年前から決めていたんです。一五年前に、ちゃんと宣言までしたんですよ」

「……？」

「あなたのお嫁さんになって上げます、ヴィンフリートさまって」からかわれたな……悟った時、すでに金茶色の髪は残映だけを残して視界から立ち去っていた。『翻意』とは無論、今からでもラインハルトの陣営に参じる気はないのかという意味であり、コルネリア・ゲルトルーデはその問いを最後までではぐらかしたことになる。

「参りましょうか、アンネローゼさま」

「幸せそうね、彼女」

「ええ」

「幸せになつて欲しい。本当に」

「シュミットバウアー子爵夫人なら大丈夫ですよ。鞆い女性ですから」

「あら……」

サファイア・ブルーの眸が真っ直ぐに見上げてくるのに、キルヒアイスはやや狼狽えた。意外にも、その視線が微笑っていないからだ。

「ジークは彼女のことをよく知っているの？」

「よく……というのは当たらないかも知れません」

言葉がわずかに言い訳の色を帯びるのに、キルヒアイスはさらにやや慌てた。

「いろいろと行きがかりがありましたら」

「そう……いろいろとあったのね。わたしの知らないところで、色々なことが……」

「アンネローゼさま？」

「後で聞かせてくれるのでしょうか、その色々なことを」

「一体これは何なんだろう……めったにないことながら、キルヒアイスはほんの少し、思考が千鳥足になるのを感じた。まるで初めてワインに酔っぱらって、まともなものが考えられなくなった時のようだった。いや実際、彼の心理は軽い酩酊状態に近かったのかも知れない。」

ふ——と、浮かんできた言葉を、キルヒアイスはそのまま口に出せていた。

「結婚……は、女性にとつて最も幸せなことなんです」

一瞬、言つてもよいのだろうか、と思つたのは、その時、はじめて気づいたからだつた。アンネローゼが皇帝の呪縛を解かれ、彼らの許へ帰ってくる。今、この時間から、アンネローゼはもう皇帝のものではない。

では、自分が彼女を愛しているということを敢えて秘し続ける必要もまたないのではないだろうか——そこまで明確な意思がキルヒアイスの胸裏に浮かんだわけではなかったが、この時の彼を突き動かした衝動の一端は確かにそれだつた。

が

「ジーク——」

ふつと視線が翳つた。

視線が落ち、アンネローゼの声が呟くように小さくなった。

「わたしには……答えられないわ、ジーク」

「アンネローゼさま？」

「……わたしには——」

「——!?」

「……気にしないで、ジーク。何でもないから」

もう一度、キルヒアイスを見上げてから、アンネローゼは小さ

く頭を振つた。その時にはもう、先ほどの笑顔が戻つてきていた。

だが、キルヒアイスは氷の柱を胸に突き込まれた思いに絶句していた。アンネローゼの、ほとんど声にならない呟きは、確かにこう言つていた。『わたしには資格がない』——と。それは、彼女にとつて、皇帝の寵姫となつた事実が依然として大きな傷として心の中に残つているということではないのか。一度は皇帝の愛人となつた自分には、再び自身の幸福を求める資格がない……アンネローゼはそう言つていいるのではないか。そして、彼の言葉は、彼女のそうした心の傷を正面から抉るものではなかったのか——と。

「アンネローゼ……さま？」

「どうしたの、ジーク。行きましょう」

キルヒアイスは慌てて後を追つた。

先を行くアンネローゼの結い上げた黄金こがねの髪の下で、はつとするほどなじが白く透き通るように艶めて見えるのに、キルヒアイスは胸を突かれた。

一〇年の歳月は確実にアンネローゼの許にも訪れ、そして去つていった。自分たちが一〇歳の少年に戻れぬように、アンネローゼも一五歳の、名もない市井の少女には戻れない。彼女には、『皇帝の……あの、ゴールデンバウム王朝の皇帝が最も寵を与えた愛人』としての過去がついて回る。おそらくは一生の間。

細やかなエピソードだつたし、帝国における正史、稗史のいずれにも載せられぬ挿話に過ぎなかつた。ことの経緯は当事者たるキルヒアイズとアンネローゼ、二人だけの胸に納められ、後に言葉にされることも、まして文字にされることもなく終わる。後世の史家にとつて大きな頭痛の種となつて残り、無数の創作、二次創作を生み出して多くの文筆家に日々の糧を与えることになる。

曰く、フリードリヒ四世逝去後、シュワルツェンの館に移ったアンネローゼに対して、なぜキルヒアイスがすぐに求愛の意志を明らかにしなかったのか、と。

この話題に触れるべきではない。

キルヒアイスは改めてそう思ったのだ。

アンネローゼは、物理的には皇帝から解き放たれたにしても、一〇年の時は、彼女をあの『黄金の時』のアンネローゼに戻すには余りにも長すぎた。まだ、時が必要だ。無用のことを言って、アンネローゼをこれ以上傷つけるなど、許されることではない。

キルヒアイスが今少し年長であるか、あるいはより世慣れた人間であつたなら、別の解釈を下していたかも知れない。確かに、アンネローゼは結婚が女性にとつての最大の幸福か否かについて答える資格がない、と答えた。その理由もまた、彼女が皇帝の寵姫であつたことに由来する。ただ、彼女は自身が自由意思に基づいた婚姻を結んだわけではなく、その意味で結婚と幸福を論じられるような資格がない、とただそう言っただけだ、と。あるいは、それがアンネローゼの真意であつたかも知れなかった。

ただ、キルヒアイスにも事情があつた。

彼がアンネローゼを案内していくのは、ラインハルトがローエングラム伯爵(当時)邸として入手したシュワルツェンの館だが、彼自身が間もなく長く帝都からは離れる予定になっていたからである。

「ジークはしばらくはオーディンにいるの？」

二人を乗せた地上車がシュワルツェンに近づいた時、アンネローゼはそう問うたが、キルヒアイスは否定の回答しかできなかった。

「間もなく帝都を離れます。多分、二ヶ月は戻ってこれられないと

思います」

「二ヶ月も……？」

アンネローゼの表情が心細げに曇った。

「大丈夫です。ラインハルトさまはずっと帝都におられる予定ですし、館に詰める人間はみんなラインハルトさまとアンネローゼさまのお味方です」

「——そうね。それは分かるけれど……いつ、オーディンを出ることになっているの？」

「予定では月末になっています。事情次第ですけれど」

捕虜交換交渉の使者として戦艦『プロツケン』がフォーゲン泊地を離れることになっているのが明日。約一週間後にはイゼルローン回廊に入り、駐留艦隊の警戒部隊と接触するだろう。

同盟が捕虜交換を望んだとして、基礎交渉がまとまるのは一〇日後。

帰ってくる頃には、ブラウンシュヴァイク公ら門閥貴族の連合軍が動き始めているはずである。いずれにしても、彼らとの問題を片づけない限り、ラインハルトを含めて三人でゆっくりと時を過ごす時間は取れそうになかった。

「そう……残念だけれど、気をつけて行っていってほしいね。危ないところに行ったりしないで」

「それは無理です。宇宙で危なくないところの方が珍しいのですから」

キルヒアイスが帝都を離れるのはこの一〇日余り後の一月末のことである。そして、彼がオーディンに帰着した時、門閥貴族によるリップシュタットの盟約が成立を見ていた。キルヒアイスは全軍の三分の一を率いて帝都を出撃するのは、それからわずか一ヶ月後のことなのである。

アンネローゼとは朝食か夕食の席を共にするのが精一杯のと

ここで、彼女の心理に対しての、あるいはあつたかも知れない誤解を解くだけの時を取れぬままにリップシュタットの戦いを迎えるに至る。

痛烈な思いとともに、キルヒアイスが自分の迂滑さを悟ることになるのは、約一年後のことである。